

きべりはむし

第11巻 第1号

目 次

ニッコウヒメハナカミキリの分布について	窪木 幹夫 1
神戸・明石近海地域の主な蛾(その1)	松本 健嗣 3
宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(続報その2)	新家 勝 6
兵庫県のオオキノコムシ(1)	高橋 寿郎 10
キバネツノトンボ物語	松本 健嗣 16
神戸市山田町の蛾(続報1)	松本 健嗣 18
西宮市のヒメタイコウチ	田中 稔 19
兵庫県におけるキバラヘリカメムシの分布	高橋 寿郎 19
オオツノカメムシ神戸市内での記録(追加)	高橋 寿郎 20
神戸市北区芦谷溪谷産ウンカ二種	高橋 寿郎 21
イシガケチョウの思い出	松本 健嗣 22
アオスジアゲハ冬至に屋外で羽化	松本 健嗣 22
宝塚市におけるセマダラナガシクイの採集記録	新家 勝 23
キマダラカミキリの採集および目撃記録	新家 勝 24
ミカンヒゲナガゾウムシ神戸市内に産す	高橋 寿郎 24
神戸産珍稀なコガネムシ数種の記録	高橋 寿郎 25
県関係文献紹介	29
会員異動	31

兵庫昆虫同好会

1983年5月

ニッコウヒメハナカミキリの分布について

窪 木 幹 夫*

ニッコウヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Pidonia*) *limbaticollis* (Pic) は日光地方から中部地方の東域に分布する *ssp. limbaticollis* (Pic)、中部山岳地域に分布する *ssp. ohbayashii* (Matsushita)、紀伊半島の伯母子岳と四国に分布する *ssp. stephani* Hayashi の三亜種より成る(図1)。

● *ssp. limbaticollis*

★ *ssp. ohbayashii*

▲ *ssp. stephani*

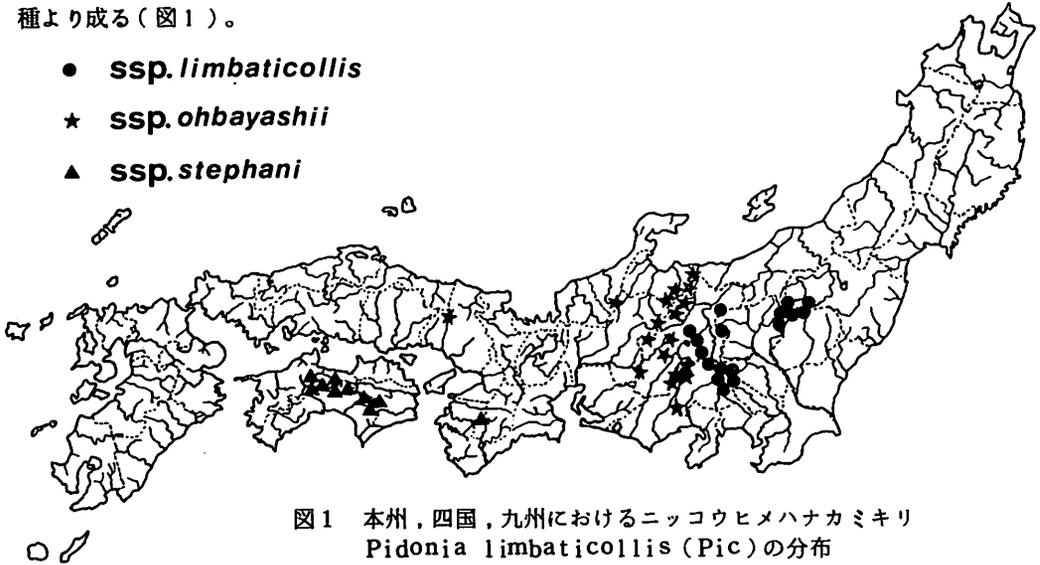


図1 本州、四国、九州におけるニッコウヒメハナカミキリ *Pidonia limbaticollis* (Pic) の分布

亜種 *limbaticollis* は頭部が黒褐色で、前胸部は黄褐色の前後縁を除き黒褐色を呈する。腹面は全体が黄褐色である。長野県美ヶ原、鼻峠、八ヶ岳には頭部や前胸部が赤褐色で上翅の黒色紋が縮小した個体が生息する。このような黒色部の退色傾向は本亜種の分布域の西域に生息する個体ほど顕著である。黒色部の発達が著しい亜種 *ohbayashii* の分布域に近い亜種 *limbaticollis* ほど明るい退色個体が出現する。両亜種は体色に関して漸次変化していくような連続的な変異を示さない。亜種 *ohbayashii* は頭部、前胸部、小楯板が黒色を呈する。腹面は頭部と胸部が黒色、腹部が黄褐色で♂では各節基部が黒色である。このような黒色部の発達は中部山岳地域の個体群に比較的安定している。亜種 *stephani* は 亜種 *ohbayashii* より地理的に離れた原亜種に似るが、脚がより明るく黄褐色で♀の触角がより短く、♀の上翅S紋がより細く、小楯板後方で消失し、Lm紋もより小さく、胸部と腹部の腹面の黒色紋がより発達する点で区別できる。

亜種 *limbaticollis* と *ohbayashii* の分布域はほぼフォッサマグナの糸魚川・静岡線を境にして東西に分かれる。中間地域には本種が生息できるような高い山はほとんどない。ただし、富士山からは両亜種とも採集されていない。一方、中部山岳地域に分布する亜種 *ohbayashii* と紀伊半島や四国に分布する亜種 *stephani* との分布域は互いに離れており、中間地域でのニッコウヒメきべりはむし Vol.11, No.1, 1983.

ハナカミキリの記録はなかった。浦田・水野(1982)は紀伊半島の伯母子岳から本種を初記録し、この個体が四国亜種に該当すると指摘した。筆者は遠山雅夫氏の御厚意により兵庫県産のニッコウヒメハナカミキリを調べる機会を得たので、その結果を報告する。

Pidonia (*Pidonia*) *limbaticollis* ssp. *ohbayashii* (Matsushita)

ニッコウヒメハナカミキリ

♂、兵庫県宍粟郡波賀町音水(標高約650 m)、21. V. 1972. 高橋寿郎採集。

この個体は写真に示したように典型的な亜種 *ohbayashii* であり(図2)、中部山岳地域の個体と外見的に区別できなかった。この記録により、中国地方の東部には従来中部山岳地域特産と考えられてきた亜種 *ohbayashii* が生息することが明らかになった。本亜種は中部山岳地域では6月下旬から8月中旬にかけて、中山帯から亜高山帯に出現するが、標高1,000 mにも満たない音水で、それも5月に採集されたことは今後の分布調査で留意しなければならない点の一つである。一方、紀伊半島の西部から前述のように亜種 *stephani* が記録されているので、中間地域での分布調査が必要である。

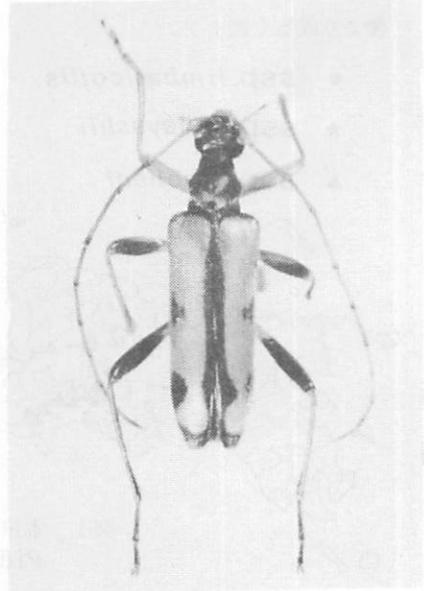


図2 兵庫県音水産ニッコウヒメハナカミキリ♂

窪木ら(1977)と窪木(1980)はニッコウヒ

メハナカミキリ(ニオオバヤシヒメハナカミキリ)がニシキウツギの花に好んで集まることを指摘している。ニシキウツギは山地に生える落葉低木で葉腋に白色～紅色に変化する長さ約8 cmの筒形花を2～3個つける。花は横向きからやや下向きに咲き、ニッコウヒメハナカミキリの成虫は、筒形の花の中に頭から入りこみ花蜜を食べたり、頭を外側に向け花粉を食べたりしている。また、花の中で交尾している雌雄もしばしば観察される。ニシキウツギは東北地方の阿武隈山地～日光山塊～中部地方、四国、九州のほか、紀伊半島や中国山地にも点々と分布している。ニッコウヒメハナカミキリが採集されていない地域でもニシキウツギの開花期をポイントに調査すれば本種を採集することが可能であろう。

巨視的にみて、ニッコウヒメハナカミキリは中部山岳地域に体色の最も黒い亜種 *ohbayashii* が生息し、これに隣接してより体色の明るい亜種 *limbaticollis* が東側に、亜種 *stephani* が西側に生息することになる。未発表であるが、九州には亜種 *stephani* よりさらに体色の明るい個体が採集されているので、これらを含め日本列島でのニッコウヒメハナカミキリの分化の歴史を検討する必要がある。

末筆ながら、貴重な標本を心よく譲られ、発表の許可を下された高橋寿郎氏とニッコウヒメハナカ

ミキリの採集記録に関する情報をいただいた鈴木和利氏にお礼申しあげる。

引用文献

窪木幹夫・柴田孝尚・田中直(1977)

群馬県・仁加又沢におけるヒメハナカミキリの生態調査—特にその垂直分布と訪花性について—
New Entomol .. 26(1・2):15-24

窪木幹夫(1980)

カミキリムシ科ヒメハナカミキリ属の訪花性。日生態会誌, 30(2):133-143

浦田和義・水野弘造(1982)

紀伊半島よりプロイニングヒメハナカミキリ。月刊むし, (135):29-30

* 東京都世田谷区大原1丁目47-15

神戸・明石近海地域の主な蛾(その1)

松本健嗣*

神戸・明石方面のトベラ、カクレミノ、ヒメユズリハ、ウバメガシ、オニヤブマオ等海岸地方で多く見かける植物の自生している地域の蛾について少し詳しく調べたいと思っている。小生永年この地域に住んでいながらまだ徹底した採集調査は試みていない。本格的調査はこれからの課題なのであるが取敢えず予告篇のつもりで本誌紙面をお借りしこれ迄の採集品中から主な種を選んで報告する次第である。また理科作品展で見た学童の採品も併せて公表させて頂く。採集者名は一応省略する。

ヘーネアオハガタヨトウはじめ従来の図鑑等に産地の一つとして神戸の名が記されている例は大方1947年迄の旧神戸市すなわちこの域内で得られたものによるのであろう。確かにこの方面には布引、太山寺真山等見事な暖帯樹林が残されている場所があるが地形は急峻で、地質は風化し易い酸性火成岩であり表層の腐植土の発達は左程芳しくはない。位置が日本列島の中央部であることも蛾類の実態がかなり解明された現在ではやゝ魅力に乏しい嫌いがある。土地柄遠隔の原産地からやって来た種に遭遇する機会も多いと思はれるし専ら植栽された植物でのみ繁殖している種もかなりあるだろう。尚今迄調査の拠点であった拙宅周囲の環境についても触れて置く必要があると思うが、それは花岡岩々盤が露出した谷川のほとりの瘠悪地で言うに足りないお粗末な場所である。それに今では周囲に家が建てこんでしまった。

* 神戸市長田区花山町2丁目14-6

1. アヤニジュウシトリバ *Alucita flavofascia*
1967年5月26日1♂1♀ 自宅
拙宅では以前からよく灯火に飛来する。
2. ニジュウシトリバ *Alucita spilodesma*
1982年7月10日1♂ 自宅
3. ツゲノメイガ *Glyphodes perspectalis*
1972年9月15日2♂♂1♀ 自宅
以後よく注意しなかったが1982年6月16日、再び1♂を自宅灯火で採集した。
4. スギタニマドガ *Rhodoneura sugitani*
1982年7月4日1♀ 自宅
小生にとってこれが本種の最初の採集体験である。
5. モリヤママドガ *Herdonia osacesalis*
1982年6月16日1♂ 自宅
本種も自宅では以前からよく灯火に飛来する常連の一つである。
6. ムナブトヒメスカシバ *Trichocerotha constricta*
1973年7月3日1♀ 自宅
7. ヒメアトスカシバ *Paranthrene pernix*
1982年6月22日1♂ 明石市山陽電車林崎駅。1978年8月27日1♀ 自宅
通常6・7月にヘクソカズラで見る普通種。ツタ、ノイバラにつく例も知られている。8月下旬に見る例は小生にとって上記の一例だけである。
8. コシアカスカシバ *Aegeria molybdiceps*
1977年8月16日1♀ 自宅
庭のコナラ(径35cm)に来ていたもの。通常晩夏にクヌギ林で♀をよく見るが神戸では2頭得たのみ。
9. ハチマガイスカシバ *Glossosphenia contaminata*
1967年7月30日1♀ 西区伊川谷町太山寺
10. クビアカスカシバ *Aegerosphenia romanovi*
1977年7月27日1♀ 垂水区名谷町奥畑
11. ウスバツバメ(マダラガ科) *Elcysma westwoodii*
1982年10月6日2♀♀ 自宅
山ノ手の住宅地に多いが山間ではイヌザクラ、ヤマザクラ等に幼虫がつく。
12. キスジシロフタオ *Epiplema cretacea*

- 1982年8月2日羽化1♂須磨区一ノ谷
ヒメユズリハの葉を二つ折りにし中にいたもの。
13. ヒメクロイラガ *Scopelodes contracta*
1962年7月2日1♀自宅
1967年8月26日1♀垂水区海岸通国道2号線
以前庭に植えていたカキ(富有?)に毎年発生していたが事情によりこれを伐り払って以来姿を消した。山間ひとり生えのカキでは見たことがない。
14. ウスミドリナミシャク *Sauris nigrilinearia*
1982年9月5日1♂ 長田区東丸山町
15. クロミスジシロエダシャク *Myrteta angelica*
1962年10月16日1♀ 灘区青谷
16. ウスズミカレハ *Poecilocampa populi*
1963年12月15日6♂♂ 垂水区名谷町奥畑
村落内の街灯(裸電球)に飛来していたもの。北区山田町に産することは既に本記に記した。
17. マガリキドクガ *Euproctis curvata*
1972年6月26日須磨区妙法寺町字蓮池(今は団地になっている)の谷間の小さな溜池のほとりのシャシャンボの低木上に終令幼虫態で静止していたものである。28日産卵7月20日になって本種♀が既に羽化していることに気づいた。幼虫の写真は不鮮明に終わったために公表できなかったが体色は濃茶褐色でドクガ(*E. flava*)よりやや大きく褐色斑に赤味がなく特に毒々しさは感じない。各体節背面の隆起は左程著しくはない。シャシャンボに食痕はなく食草とは断定し難い。すぐ背後にはリョウブ、ソヨゴ、ヤマモモ、アラカシ、ネズミモチ、ヤブツバキ、クロマツ等が小暗く密に茂っていた。こう云う環境はこの方面には今も随所に残っている。大阪箕面公園、枚岡神社ではかなりの個体が採集されている。
18. キアシドクガ *Ivela auripes*
1982年6月26日1♂1♀ 中央区再度谷
神戸市街地背山の二次林地帯にはクマノミズキが断然多いためか梅雨明けの頃谷間を群飛する様は壮観でもある。
19. クロフシロヒトリ *Spilosoma(spilarctia) lewisi*
1965年5月5日1♀ 長田区高取山(作品展)
小生兵庫県では但馬段ヶ峯で得たのみ、大阪箕面でも採集されている。
20. エゾヨツメ(ヤママユガ科) *Aglia tau*
1965年5月3日1♂ 須磨区妙法寺町(作品展)

以下はヤガ科

21. クビグロケンモン *Acronicta digna*
1975年8月20日1♀ 西区伊川谷町小寺
昼間沼沢に面した雑木林中のエノキの幹に静止していたものである。カキツバタを食害すると云う報告がある(誘蛾燈№60 1975)。
22. ワモンキシタバ *Catocala fulminea*
1961年7月9日1♂ 兵庫区里山町
神戸では意外に少い種である。
23. ウスイロキシタバ *Catocala intacta*
1965年7月10日1♂ 中央区布引(作品展)
24. ヒメアケビコノハ *Othreis fullonica*
1972年8(?)月1♂ 長田区上池田町(作品展)
25. ソトジロツマキリクチバ *Arytrura muscals*
1962年7月10日1♀ 自宅
26. キシタアツバ *Dichromia claripennis*
1977年7月2日羽化1♀ 垂水区名谷町奥畑
オニヤブマオについていたものである。

以上今回掲げた種は二・三を除けば如何にも二次林地帯らしい産物であり、しかも落葉樹林的な種が多い。次回以降はもっと常緑樹林的なものが掲載できるよう努力するつもりである。

宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(続報その2)

新 家 勝

I はじめに

宝塚大橋の照明燈で採集した蛾については、本誌第9巻第1号以来、報告しているが、今回は1982年中の採集品について報告させていただく。なお、今回もまた、採集場所について「宝塚市」を省略して記載する。

II 採 集 結 果

1. Sphingidae スズメガ科

(1) *Smerinthus planus* Walker ウチスズメ

1982.5.9 武庫川町

(2) *Deilephila elpenor* Butler ベニスズメ

1982.5.12 武庫川町

2. Saturnidae ヤママユガ科

(1) *Philosamia cynthia* Butler シンジュサン

1982.9.3 武庫川町

3. Arctiidae ヒトリガ科

(1) *Conilepia nigricosta* Leech マエグロホソバ

1982.9.17 南口2丁目

(2) *Miltochrista miniata* Forster ベニヘリコケガ

1982.8.10 武庫川町

(3) *Spilosoma bisecta* Leech セスジヒトリ

1982.5.9 南口2丁目

4. Noctuidae ヤガ科

(1) *Anarconicta caliginea* Butler コウスベリケンモン

1982.5.25 南口2丁目

(2) *Amathes semiherbida decorata* Butler ハイイロキシタヤガ

1982.5.28 南口2丁目

(3) *Orthosia cedermarki* Bryk ウスベニキリガ

1982.4.24 武庫川町

(4) *Orthosia carnipennis* Butler アカバキリガ

1982.4.24 武庫川町

(5) *Mythimna turca limbata* Butler フタオビキヨトウ

1982.5.18 南口2丁目

(6) *Leucania pallens* Linné タンポキヨトウ

1982.6.1 武庫川町

(7) *Leucania placida* Butler クロシタキヨトウ

1982.6.17 南口2丁目

(8) *Procus ophiogramma* Esper クサビヨトウ

- 1982.6.17 武庫川町
- (9) *Dadica lineosa* Moore シロモンオビヨトウ
1982.5.17 武庫川町
- (10) *Risoba prominens* Moore リュウキュウキノカワガ
1982.9.14 武庫川町
- (11) *Jaspidia distinguenda* Staudinger シロマダラコヤガ
1982.6.1 南口2丁目
- (12) *Phyllophila obliterata cretacea* Butler ヨモギコヤガ
1982.5.30 武庫川町
- (13) *Catocala patala* C.etR.Felder キシタバ
1982.7.12 南口2丁目
- (14) *Oraesia lata* Butler オオエグリバ
1982.9.22 南口2丁目
5. Notodontidae シャチホコガ科
- (1) *Gonoclostera timonides latipennis* Butler クワゴモドキシャチホコ
1982.5.10 武庫川町
6. Lymantriidae ドクガ科
- (1) *Lymantria dispar japonica* Motschulsky マイマイガ
1982.6.21 武庫川町
7. Thyatiridae トガリバ科
- (1) *Demopsestis punctigera* Butler ホシボシトガリバ
1982.4.24 武庫川町
8. Geometridae シャクガ科
- (1) *Calothyisanis amata ovidius* Bryk ベニスジヒメシャク
1982.4.24 武庫川町
- (2) *Calospilos miranda* Butler ユウマダラエダシャク
1982.5.26 武庫川町
- (3) *Rynchobapta punctilinea* Leech モンオビオエダシャク
1982.8.4 武庫川町
- (4) *Synegia hadassa hadassa* Butler ハグルマエダシャク
1982.6.7 武庫川町
- (5) *Percnia griaffata* Guenie オオゴマダラエダシャク

1982.8.13 南口2丁目

(6) *Ascotis selenaria cretacea* Butler ヨモギエダシャク

1982.9.22 南口2丁目

9. *Pyralididae* メイガ科

(1) *Macalla margarita* Butler ナカジロフトメイガ

1982.7.8 武庫川町

(2) *Craneophora ficki* Christoph ナカムラサキフトメイガ

1982.8.14 武庫川町

(3) *Endotricha portialis* Walker キベリトガリメイガ

1982.8.14 武庫川町

(4) *Mabra charonialis* Walker ミツテンノメイガ

1982.6.1 南口2丁目

(5) *Syllepte derogata* Fabricius ワタノメイガ

1982.9.22 南口2丁目

10. *Tortricidae* ハマキガ科

(1) *Tortrix sinapina* Butler リンゴキマダラハマキ

1982.6.3 武庫川町

Ⅲ ま と め

1982年の新たな採集品を科別に示すと次の通りになる。

スズメガ科	2種
ヤママユガ科	1種
ヒトリガ科	3種
ヤガ科	14種
シャチホコガ科	1種
ドクガ科	1種
トリバガ科	1種
シャクガ科	6種
メイガ科	5種
ハマキガ科	1種
計	35種

これまでの年と同様ヤガ科が最も多かった。また、月別に示すと次の通りになる。

4月	4種
5月	10種
6月	8種
7月	2種
8月	5種
9月	6種

1982年は、梅雨期にはいっても雨が極度に少なく、武庫川敷の雑草が随分、枯死した。その上、8月初めには、第10号台風の豪雨による増水のため、武庫川敷内の草地在り冠水した。本来なら最も昆虫の多い6月中旬から8月末にかけて、一般的に昆虫が少なかったのは、これらの天候の影響ではないかと思われる。ただし、1978年の照明燈の完成時に比べて、宝塚大橋へ飛来する昆虫は全般的に減少していることも確かである。

今回の採集品中セスジヒトリは、1981年6月12日の某新聞紙上で「幻のセスジヒトリ 95年ぶり香川で発見」と報道されたが、その後の調査では各地で採集されていることが明らかになった種である。なお、筆者は、宝塚大橋から約1km下流の宝塚市美座2丁目において1980年8月31日に1頭採集していることを付記しておく。

兵庫県のオオキノコムシ (1) (兵庫県甲虫相資料・124)

高 橋 寿 郎

日本産のオオキノコムシ科 (Erotylidae) の研究史については中条道夫博士の名著 “日本動物分類, 大蠹虫科” (1936) に於いてその時代までを概説しておられる (この中で当時の日本産20属, 88種, 2変種が取扱れていた。いわゆる当時の日本であるから台湾、朝鮮産が入っていたものでそれらを除くと3亜科, 18属, 52種が扱はれたことになる)。そしてその後中条道夫博士、荒木東次氏、中根猛彦博士等による研究が続けられると共に中根博士の “日本の甲虫 (40~45)” (新昆虫, 11巻, 3, 5, 7, 10, 12号, 1958, 3亜科, 18属, 78種を取扱はれた) に於て日本産の総括をされると共に1963年原色昆虫大図鑑, 第2巻 (20属70種が図説されている) の中に多くの本科のものを原色で図説された。また中条博士は1969年 “Fauna Japonica : Erotylidae” を発刊 (本書には3亜科19属90種がふくまれている) 日本産の総まとめきべりはむし Vol.11.NQ1983.

を発表された。その後中根博士によって6新種(内1新種は中根博士が1961年に亜種と記載されたものを独立種に取扱れた)、1新亜種が記載されている(Fragm. Coleop. Pars. 22-28, pp. 98-99, 1977-1979., Rep. Fac. Sci. Kag'oshima Univ. (Earth. Sci. & Biol.), No. 14, P.43-53, 1981)。だから現在の日本産のオオキノコムシ科は3亜科, 19属, 96種, 1亜種になるかと思う。本州産だけを取りあげると3亜科, 18属, 72種1亜種である。

生態に就いてはその総合的なものは勿論, 1つの種に就いての完全な生活史の解明も現在ではまだ充分出来ているとは考えられないが一部の種に就いての卵, 幼虫等の幼期の記載とか断片的な生態に就いての報文はいくらか見られる(林, 中村, ニューエントモロジスト, 2巻, 3/4号, P.7-17, 1952, 野淵, 昆虫, 22巻, 1/2号, P.1-6, pl.1, 1954, 22巻, 2号, P. 53-60, pl. 8, 9, 1955, 宮武, 新昆虫, 8巻, 2号, P.6, 1955)。

兵庫県に産するオオキノコムシに就いてはまだ充分調べられているとは考えられず現段階での発表は時期尚早の感無きにしもあらずであるが今迄全くこの仲間就いての県下の総合的な報告の様なものが見当たらないので一応現時点でのものをまとめておき度く本文を叩き台に県下のこのグループの分布相がはっきりとする事を期待したいと思う。

同定に就いては上記文献ではゞ間違なく出来ると思うが尚浅学未熟のため誤りあるやもしれない。夫等に関して御教示頂ければ幸である。

Family Erotylidae

オオキノコムシ科

Subfamily Dacninae

1. *Dacne japonica* Crotch, 1873 シイタケホソオオキノコムシ*

本種はCrotch氏によって長崎産で記載された(Ent. Monthl. Mag. 9:188, 1873)。中条博士は食茸としてシイタケ, ヒラタケ, エブリコをあげておられる(1969)。幼虫もシイタケを害すると(中根, 1958)、分布は北海道からトカラ諸島迄広く日本特産と云われている。

シイタケの害虫として知られていると云うのであるがほとんど採集が出来ていない。記録も全く無い。したがって県下の分布状況のよくわからない種の一つである。

産地: 神戸市烏原(Iex., 27-1V-1972)** 城崎郡日高町堀[高橋, 1978]。

* 種の配列並びに和名は原則的に中条博士(1969)にしたがった。但し、一部最近の知見で変更している所もある。

** 産地のところで[]の中のものは文献からの引用、()の中のものは筆者所有標本による。

2. *Dacne picta* Crotch, 1873 セモンホソオオキノコムシ

本種は Crotch 氏によって "Japan, Throughout the islands." として記載された。G. Lewis 氏は冬期ケヤキの樹皮下で採集したとのべておられ (Ann. Mag. Nat. Hist. (5) 20 (115): 54 & 56, 1887)、林博士もケヤキの樹皮下に多くいると報告しておられる (New Entom. 2 巻, 3/4 号, P. 10-12, pl. ii, Figs. 1-13, 1952)。

中条博士は食茸としてカイガラタケ, エノキダケ, ノウタケ, ムラサキチドメ, ハナビラタケ, コルクタケ等多く記録しておられる (1969)。

分布は日本全土, トカラ諸島にまで分布している。

兵庫県下では諭鶴羽山では非常に多く採集されているのであるがその他での記録が全く無い。もっと産地はあるように思はれる。

本種の幼虫と蛹については林・中村氏の報告がある (1952)。

産地: 三原郡諭鶴羽山 [久松, 1973]。

3. *Dacne zonaria* Lewis, 1887 ズグロホソオオキノコムシ

本種は Lewis 氏により "Kiga, Miyanoshita, Nikko, Konose, Fukushima & Sapporo" を産地として記載された (I. C., P. 56, 1887)。分布は北海道, 本州, 九州であるが本州では比較的北の方にいるように思はれる。カワラタケなどの類につくようであるとのこと。兵庫県では扇の山での記録があるのみである。

産地: 美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

4. *Megalodacne bellata* Lewis, 1883 カタボシエグリオオキノコムシ

Lewis 氏により原産地は明記されていないが "Japan: in all the islands" として記載された種である (Ent. Monthl. Mag., 20: 139, 1883)。中条博士は食茸としてカワラタケ, マンネンタケ, ニンギョウタケモドキ, サルノコシカケの類をあげられている (1969)。日本特産種で北海道, 本州, 四国, 九州に分布し中根博士によると夜間茸上に現れ比較的普通の種である (1958) と云うのであるが筆者、県下で採集したことが無い。

産地: 川西市笹部 [仲田, 1978], 氷上郡 [山本, 1958], 美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1970]。

5. *Episcapha* (*Episcapha*) *fortnii* Crotch, 1873 フォーチュンオオキノコムシ

本種は "Hiogo, in fungi on firs, in great profusion" として Crotch 氏が記載した (Lewis leg., Ent. Monthl. Mag. 9: 188, 1873)。

中条博士は食茸としてカワラタケ、アラゲカワラタケ、ウスベニウロコダケを挙げておられる。
(1969)

日本の本州、四国、九州に産し、特に関東以南に産すると(中根, 1958)、また奄美大島、トカラ諸島から台湾、支那、印度支那に *subsp. consanguinea* Crotch が分布している。

幼虫に就いての報告はある(昆虫, 23巻, 1号, P.58-59, pl. ix, Figs. 21, 25 & 30, 1955., あげは, 8号, P.9, Figs. 3A-I & 4A-F, 1960)。

兵庫県下では神戸市内とか明石公園などには大変多いのであるが他の地での記録が思った程無い。もっと広く分布していると思はれるのだが。尚 *Episcapha* 属に関しては荒木東次氏(宝塚昆虫館報 65:1-6, 1950)及び野淵博士(昆虫科学, 1巻, 2号, P. 5-6, 1953)の報文は貴重である。

産地: 兵庫 [Lewis leg., Crotch, 1873]. 神戸市烏原 (2 exs., 19-VI-1980, 30 exs., 9-VIII-1980, etc.), 藍那 (1 ex., 5-VII-1978), 明石市明石公園 (3 exs., 15-VI-1975, 1 ex., 16-VIII-1976, 1 exs., 12-VI-1977, 2 exs., 9-VI-1978, 4 exs., 15-VI-1978, 8 exs., 24-VI-1978, 29 exs., 29-VI-1978, 2 exs., 7-VII-1979) 城崎郡三川山 [高橋, 1975].

6. *Episcapha (Episcapha) gorhami* Lewis, 1879 ゴルハムオオキノコムシ

Lewis氏により "Yezo" 産で記載された種である (Ann. Mag. Nat. Hist. [5]4(24): 465-466, 1879)。食茸としてはカワラタケ、ウラギンタケ、ミカワタケが挙げられている(中条, 1969)。北海道から九州までに普通に産する種のように晩秋、早春には樹皮下に見られるがカワラタケなどの多孔菌に普通であると(中根, 1958)、幼虫は野淵博士が報告している (Kontyu, 23巻, 1号, P.57 & 59, pl. ix, Figs. 20, 22, 24, 27 & 29, 1955)。

本種も兵庫県下では広く分布している。どちらかと云えば中央部から北の山岳地帯に多くいるように思はれる。

産地: 川西市見野, 芋生, 笹部 [仲田, 1978], 笹部 (4 exs., 9-IV-1978), 能勢妙見山 (5 exs., 30-VII-1982), 川辺郡猪名川町内馬場 [仲田, 1978], 槻並 (7 exs., 4-V-1979)。神戸市摩耶山 (6 exs., 15-VI-1979), 烏原 (1 ex., 5-V-1976)。神崎郡大河内町砥の峯 (1 ex., 6-VIII-1977)。宍粟郡音水 (1 ex., 24-VI-1973), 赤西 (2 exs., 3-VI-1979, 13 exs., 23-VI-1979)。出石郡出石町堀橋 [高橋, 1963]。養父郡水の山 (2 exs., 13-VII-1954, 4 exs., 2-VII-1957, 1 ex., 21-VII-1958)。美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975]。

7. *Episcapha* (*Psiloscapa*) *morawitzi* (Solsky, 1871) モラヴィツオオキノコムシ

基本産地は "O. Sibirien" とある (Horae Soc. Ent. Rossicae, 8:266, 1871)。

日本全般から済州島, 朝鮮, 満洲, 支那, シベリアなど広く分布する種となっているが日本では稀な種のようなのである。Lewis氏が*E. taishoensis*と記載した種 (Ent. Monthl. Mag., 11:79, 1874) がこの種に当る。たゞし一般にこの種と同定されて来た種は*E. gorhami* Lewisらしいと (中根, 1958)。

県下から上記学名での記録がある。真の本種のことであるか又は同定違いであるか標本が見られないので良くわからない。真の本種となると大変珍しい種である。御影と云うが六甲山系と云う意味になる。良く調べなくてはいけない種である。

産地: 神戸市御影 [関, 1933]

Subfamily Triplacinae

8. *Encaustes cruenta praenobilis* Lewis, 1883 オオキノコムシ

Lewis氏により "Japan: fairly common in all the islands" として記載された種である (1883)。食茸としてはヒラタケ, ツリガネタケ, ツガサルノコシカケ, アシグロタケ, ミカワタケ, ウチワタケ, コフキサルノコシカケを中条博士は挙げておられる。原亜種*E. cruenta* Mac Leay, 1825はジャワに産する種で東洋区各地に広く分布し10亜種に別けられていてどちらかと云えば南方系の種である。

ところが日本に分布しているこの亜種は北海道, 本州, 四国, 朝鮮に分布しているとなっているが東北地方とか北海道には平地にも多くいるようであるが西南日本では山地に産して可成り珍しい種に属するようである。

兵庫県下の分布も北部山地にはいるようであるが筆者は未採集である。御影 (六甲山系) の記録が注目される。

産地: 神戸市御影 [関, 1933], 養父郡氷の山 [高橋, 1955], 美方郡扇の山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975]。

9. *Aulacochilus sibiricus* Reitter, 1879 ルリカタピロオオキノコムシ

従来*A. bedeli* Harold, 1880 (基本産地・日光) として知られていた種である。中根, 中条両博士 (1958, 1969) も言及しておられたが最近中根博士がS. M. I-Khnzorian氏の論文 (1975) を紹介され (1976), 上記種に取扱うことが良いとの考へをのべておられる。

本州, 九州および台湾に分布し, 平地低山地に多いとのこと (中根, 1958), 中条博士は食

茸としてアラギカワキタケ、カイガラタケ、アラゲカワラタケ、カワラタケ、マツノネクイタケ、ツガルサルノコシカケ、キクラゲ等を挙げておられる(1969)。

蛹と幼虫に就いては新村氏の報文(植物及動物, 7巻, 6号, P.1065-1066, Fig. 2A-B, 1934), 幼虫に就いては野淵博士の報文(1954)が知られている。

兵庫県下では案外と産地が知られていない。

産地: 川辺郡猪名川町猪淵[仲田, 1979, 1982], 川西市能勢妙見山(5 exs., 30-VII-1982), 多可郡鳥羽(1 ex., 5-VII-1975), 相生市三瀬山(1 ex., 20-VII-1974)

10. *Aulacochilus japonicus* Crotch, 1873 ニホンカタビロオオキノコムシ

本種はG. Lewis氏採集による "On Maiyasan, Hiogo" 産でCrotch氏が新種記載された種である(Ent. Monthly Mag. 9:189, 1873)。北海道にはいないようだが本州, 四国, 九州, 伊豆大島, 朝鮮に分布し本州では普通種と云えると思う。中条博士による食茸も多く(1969), 蛹については高千穂, 安松氏の報文(Mushi, 11巻, 2号, P.198-199, 1939), 新村氏(1939), さらに幼虫は新村氏のもの以外に野淵博士(1954)のものがある。

兵庫県下にも多く産する種である。幼虫で越年し4月中旬から羽化してくるとある。

産地: 川辺郡猪名川町槻並(1 ex., 4-V-1979), 川西市笹部[仲田, 1978] 能勢妙見山(6 exs., 30-VII-1982), Hyogo, Mayasan [Crotch, 1873, Schonfeldt, 1887], 神戸市御影[関, 1933], 藍那(24 exs., 5-VII-1978, 8 exs., 7-IX-1978), 鳥原(1 ex., 30-VIII-1975), 須磨鉢伏山(10 exs., 9-VIII-1975), 明石市明石公園(1 ex., 18-IX-1976, 1 ex., 3-VII-1977, 1 ex., 10-VII-1977, 30 exs., 9-VI-1978, 1 ex., 14-VI-1978), 神崎郡大河内町川上(2 exs., 3-IX-1977), 氷上郡神楽[山本, 1958], 城崎郡温泉舎屋[高橋, 1975], 城崎町(1 ex., 25-X-1978), 養父郡氷の山(1 ex., 6-VII-1973, M. Yuma leg.), 美方郡扇の山[辻, 1963, 辻, 岸田, 1972]。

11. *Eutriplax tuberculifrons* (Lewis, 1887) ヨツボシツノオオキノコムシ

Lewis氏により "Miyanoshita, Chiuzenji & Sapporo in Yezo" を産地として *Eudaeonius* 属で記載された(1887), その後同氏により本属の種とし取扱われた(1889)。大変はっきりした斑紋を前胸背に有するのでよくわかる種である。和名のツノと云うのは♂の頭頂の瘤のことを云ったのでいくらか誇張しすぎると中根博士はのべておられる(1958)。♀にはこれがないので *Triplax* 属と区別が付きにくいとのこと。山地のヒラタケ, タモギタケなどに多いと。県下では北部山地帯での記録があるのみである。

産地：養父郡氷の山 [4 exs., 4-V11-1965, K. Tsuji leg.], 美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975],

12. *Aporotritoma laetabilis* (Lewis, 1887) セグロチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Ikenchaya in Yamato" (大和一軒茶屋)産の1頭(拘網の偶然の一振り)で採集, 22-V1-1881)でTriplax属で記載された(1887)。中条博士はTritoma属(1936), Pseudotritoma属の種として扱っておられる(1963)。最近再び中根博士はAporotritoma属に含めた方がよいとの考えを述べておられる(1976)。分布は本州, 四国, 九州となっているが比較的少い種のようにであり兵庫県下でも辻氏の音水での記録以外筆者は坂の谷で得ている。

産地：宍粟郡音水 [1 ex., 22-V-1965, K. Tsuji leg.], 養父郡坂の谷 (2 exs., 22-V11-1979),

(Augst. 1982)

キバネツノトンボ物語

松 本 健 嗣

キバネツノトンボ (*Ascalaphus ramburi* MacLachlan) は我国産扇翅亜目唯一の美麗種であり、且つ陽性で複雑活発な飛翔習性から蝶以外の昆虫では最も優美可憐なものと云ってもよからう。風薫る5月、輝かしい陽光の下、低灌木草原上を低く徘徊し時には翅を水平に展開したまま斜面上を低く軽快に滑翔し、又人の背丈程の高さを保って勢いよく一直線に飛んでゆく。特に無風の日にはギフチョウのようにヒラヒラと優しく飛ぶ。だがマツの花に群集するヒラタハナムグリ等に近づくと果敢に襲撃し、被捕食者が逃げると執拗に追いかけてゆく。

近畿地方で今迄に筆者が野外採集で若しくは標本により知った産地は次の4ヶ所のみである。

滋賀県八日市市布施町布施山 (1974 筆者)

大阪府寝屋川市香里園 (1962 宮崎俊行・晴久)

同豊能郡剣尾山々麓 (1960 自然科学博物館)

兵庫県小野市青野ヶ原 (1965-1975 筆者)

他1964年頃迄阪急・能勢電車が配布していた沿線採集案内(パンフレット)には川西市一ノ鳥居が産地として紹介されていた。またASIATIC INSECTS (1962)には近畿でたゞ一つ京都

(竹内吉蔵)が産地として記されている。以上の産地は台地、丘陵、低山域の小盆地であり、図鑑書物に記されている中国地方、東京、信越地方の産地、更には欧亜大陸産の同属各種の分布から連想してキバネツノトンボが見られる地方は内陸高原的な広々とした開放的な地形であり、国内分布を蝶に例にとると、棲見環境からしてもキマダラルリツバメ、ヒョウモンモドキ、ゴマシジミ、ミヤマシジミその他大陸との関連の強いオープンランドの蝶とどことなく相似たものが感じられる。だが本種の場合は国外からは未知のようで、満州、シベリア、朝鮮半島には別種チョウセンキバネツノトンボ(*A. sibiricus* EVERSMANN)が産すると云う。青野ヶ原、八日市、東京井ノ頭の場合は附近に広い池(もとは湿地湧水地)があり、表土の湿り気も棲息には重要な条件なのかもしれない。本文のタイトルからすれば当然生活史にも言及せねばならないのだが筆者遺憾ながらよく調べていない。以前多産した青野ヶ原で1971年頃自衛隊のホーク基地建設が決まり、以後同所への出入がチェックされるようになり調査が思いに任せなかったせいもあるが、草葉上で翅を開き震わせている♀に♂が同じ姿勢で hovering しつゝ、近づくと場面を一度見たが、他に気をとられていて十分観察しなかったのは今思うと誠に不覚であった。なわばり行動(territorial behaviour)は観察してない。

以上の通り目下貧弱な資料しか持たない筆者が本属本種について論ずるとはまさに井蛙の論又はヨシの髄から天上を覗く観がある。

故に話しはこれ位にして置くが当面の筆者の希望は地元兵庫県及び近隣での本種の現存の地を知ることであり、又四国が分布域に含まれていないがこれと関連して近畿南部の産地を確かめ度い。

〈参考文献〉

1. 石井 徳 武蔵野昆虫記(1940 三省堂)
2. A. D. IMMS A GENERAL TEXTBOOK OF ENTOMOLOGY(1925)
3. 岡崎常太郎 昆虫700種(1936 松邑三松堂)
4. 平山修次郎 原色千種昆虫図譜(1933 三省堂)
5. 竹内吉蔵 原色日本昆虫図鑑(1955 保育社)
6. 伊藤修四郎ほか 同上新版(1977 保育社)
7. 朝比奈正二郎ほか 原色昆虫大図鑑Ⅲ(1965 北隆館)

(小林桂助氏よりの私信で同氏が1982年5月15日加東郡社町で数頭採集をされたとのこと—高橋)

神戸市山田町の蛾(続報 I)

松 本 健 嗣

1. ゴマフヒゲナガ *Nemophora raddei* Rebel

1964年4月16日1♂1♀ 北区山田町金剛童子山

4月後半同山ウナギノ手池奥の小湿原脇のヤナギ科 *Salix* sp. の花穂上で現在も見かける。局地性で棲息域は狭小のように思はれる。他では三田市小柿水源池奥で見ている(1969-IV-29)。

当地での食草 *Salix* sp. については筆者浅学にして目下種名は表明できない。

尚筆者は山田町周辺ではヒゲナガガ科として11種を記録している。

2. ハガタシャチホコ *Hagapteryx admirabilis* Staudinger

1975年8月8日1♀ 山田町宇藍那

3. ナカジロトガリバ *Togaria tancrei* Graeser

1973年11月3日1♂ 同原野(現北甲栄台町)

4. ヒメトラガ *Asteropetes noctuina* Butler

1966年6月12日1♂ 同丹生山

上記3種は深い広葉樹林では珍しくないが当地は二次林のためかいずれも少ない。

5. ガマキンウワバ *Autographa gamma* Linnaeus

1973年9月25日1♀ 同宇小部

欧州・シベリア系の蛾で同定して頂いた杉繁郎先生からの私信では目下本州最西の記録との由。

四国からは2ヶ所で採集されている。

6. ゴマシオキシタバ *Catocala nubila* Butler

1973年8月5日1♀ 同原野(現北甲栄台町)

本種はブナ、イヌブナに固有の種とされる。同地から約10km東方の六甲山々頂附近にはそれらの自生地があるので一応そこから飛来したものと看做し度い。尚この記録は藍那地区自然環境調査(1979)で既に報告したが京阪神では数少ない採集例であり、また顕著な移動性を呈す例として改めて本誌に掲載させて頂く次第である。

西宮市のヒメタイコウチ

田 中 稔

1982年5月4日、自宅附近(西宮市上ヶ原九番町)を犬と散歩中に、田んぼの土手を歩行中のヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* Esaki を発見したので、附近の導水路に落ちているナイロン袋の下で、2♂♂4♀♀を採集したので報告する。この水路は仁川より導水されたもので、仁川上流の甲山湿地には本種がかなり産する。

本種を糸ミミズのエサで、水ゴケを入れた水槽で飼育していると、5月29日水ゴケの上に白色のイソギンチャクのような卵を20卵程産卵したが、雨水によりつかってしまい孵化は見られなかった。

兵庫県におけるキバラヘリカメムシの分布

高 橋 寿 郎

キバラヘリカメムシ (*Plinactus bicoloripes* Scott) の前胸背の側角に、前上方に向う鋭いトゲのある個体があることを長谷川仁氏はとりあげられて、特にこの型は関西以南に分布するらしいと記しておられる(インセクトリウム, Vol. 9, No. 10, P. 263, 1982)。そしてこの型は近年中国で記載された *Plinactus dissimilis* Hsiao に当るらしいとも述べておられる。手許にある“中国蟻類昆虫鑑定手冊、第一冊、1977”にはこの両者が図説されていて(P. 246, pl. 44, f. 578, 579)、後者の分布は中国大陸の中央部に広くいるようになっている。特長はやはり前胸背の側角の前上方に向う鋭いトゲの有無である。

元来この種は兵庫県下ではそれ程普通にいないのか記録がほとんどない。注意が足りないのかも知れない。筆者の手許にも僅か18exs.しか無い。ところでこの内2exs.は明らかに前胸背の側角に上方に向う鋭いトゲを有する個体である。そこで僅かの個体であるが県下の本種の分布状況の推測を混えて解説をしてみたい。

まづ兵庫県下におけるキバラヘリカメムシの産地を記録と一緒に記して見る(筆者所有標本にはデータをつけた)。産地：洲本市先山[堀田, 1978]、西宮市岡田山[女学院, 1974]、神戸市六甲山[長谷川, 1982]、鳥原(1♂, 5-V-1968, 1♀, 28-V-1972, 1♀, 21-III-1974, 1♀, 3-W111-1974, 1♂, 3♀, 10-V111-1974, 1♂, 2♀, 18-V111-1974, 1♀, 2-V1-1978, 1♀, 28-V1-1982, 1♂, 15-V11-1982, 1♂, 29-X-1982)、垂水(1♀, 23-IX-1979)、穴栗

郡赤西(1♀, 3-V1-1979), 美方郡扇ノ山[高橋, 1975]。

以上のごとくで記録は少いが県下に広く分布しているようだと言うことは良くわかる。

さて前胸背の側角に前上方に向う鋭いトゲのあるものは筆者は県下産を次のように所有している。即ち、宍粟郡福知深谷(1♀, 16-V1-1975, M. Yuma leg.), 美方郡湯村(1♀, 3-V1-1952), 長谷川氏は六甲山で8月に採集したキバラヘリカメムシの中にはトゲのあるものも混入していたと記しておられる。筆者は六甲山系でこのトゲのある方は採集していない。こちらの方も兵庫県下でどの様に分布しているのかこの僅かの例では見当がつかない。少くとも3ヶ所の産地からすれば県下全般に分布している種のように思はれる。

また長谷川氏によると8月末頃から11月にかけて採集される個体は肢の基部が紅色で5月から7月にかけて採れたものは黄色であると記しておられる。所有標本全部を調べたところでは8, 9月採集の標本はきれいな紅色で, 3~7月採集したものは黄色(7月のものは黄部がやゝ黒色であった)であった。

確かに兵庫県下には前胸背側方にトゲをもったものもっていないもの2種が分布しているわけでこの2種がどの様に県下に分布しているのかはもっと詳しい調査をしてみないとわからない。それと兵庫県下に於けるこのカメムシは年2回発生しているのだろうと思うがこちらも現在では良くわからない。採集もの今の所3~9月しか得ていなく(1982年10月29日長い継ぎ竿の網で樹の梢をユスってみたところ大変きれいな1♂が入って来た。その付近を何度かやって見たが1♂だけだった), 恐らく成虫越冬であろうから10月以後の成虫の採集がもっとあってよいと思はれる(東京では10月以降2回目の成虫が出るとのこと)。このあたりの調査もやらなくてはと考える。食草はツルウメモドキ, マサキ, ツリバナ, マユミ, コマユミ, ニシキギ等が知られている。又卵, 幼虫1~5令の図説が後藤 伸氏によってされている(四国昆虫学会々報, Vol. 3, No. 3/4: 55-57, 1952)。

オオツノカメムシ神戸市内での記録(追加)

高橋 寿郎

先号(Vol. 10, No. 2)でオオツノカメムシの記録を報告させて頂いたが松本健嗣氏がコレクションを整理していたら神戸市内で次の2♀を採集していると賀状で御教示頂いた。珍しい種であるから記録を発表しておく。御連絡頂いた松本氏に厚く御礼申しあげる。

採集地: 神戸市山の街(1♀, 22-V11-1974), 金剛童子山(1♀, 23-V-1974), 共に松本健嗣氏採集, 同氏所有。

神戸市北区芦谷溪谷産ウンカ二種

高橋 寿郎

○ キボシマルウンカ *Gergithus iguchii* Matsumura

テントウムシ科のエピラクナ属の種に良く似ていて仲々きれいだである。古く江崎博士(日本昆虫図鑑, P. 322, f. 867, 1950), 竹内博士の京都貴船産の原色での図説(原色日本昆虫図鑑下, pl. 23, f. 318, P.66, 1955)があり, また原色昆虫大図鑑, 第3巻にも図説されている(pl. 66, f. 8, P.131, 1965)。それらによると本州と四国の山地で採集されるが一般にはまれと解説されている。

1982年9月13日神戸市内芦谷溪谷で多くいるのに出会った(内4 exs. leg.)。

本種の原因載は見えないが種名に *iguchii* とあるのは郷土の昆虫研究の大先輩井口宗平氏に献名されているわけで基産地も兵庫県であろうと考えられる。事実井口氏自身1908年の昆虫世界誌上(Vol. 12, No. 131, P. 292)に“兵庫県佐用郡産昆虫目録”と題して発表された報文の中でマルウンカの一つ *Hemisphaerius*?として記録された後氏自身キボシマルウンカ *Hemisphaerius luteopictus* Mats.と訂正された種(1. C., Vol. 13, No. 141, P. 205, 1909)が之に当ると思はれる。従って兵庫県下では既に記録がある種である(山本義丸氏の“兵庫県氷上郡昆虫目録, 1958”には見当らなかった)。10月7日には市内の烏原でも採集出来た。県下では可成り広くいる種ではないかと考えられる(出現期の関係で見落されているように思はれるが—)。

西川氏は“箕面の同翅目, 1980”の中で“ハンノキヤカワヤナギの枝をピーテグして leg. を採っている(1975年5月18日, こちらの出現期は早い)”と記録しておられる。

○ アヤヘリハネナガウンカ *Losbanosia hibaensis* (Matsumura, 1935)

前翅前縁部に綾波状の大きな赤褐色紋をもつ美しいハネナガウンカの1種で古く江崎博士の図説(1. C., P. 310, f. 833, 1950)もあれば竹内博士の京都大悲山産の原色図説もある(1. C., pl. 23, f. 350, P. 65, 1955)。原色昆虫大図鑑, 第3巻にも図説されていて(1. C., pl. 65, f. 11, P. 130, 1965), 本州, 四国, 九州に分布するが稀種とされている。

最近林 正美氏が本種の埼玉県下の産地を紹介されると共に若干の解説をされている(Rostria, 34: 417-418, 1982)。それによるとやはり産地は局所的であるむね記しておられる。食草については詳しく知られていないようである。兵庫県下での記録はどうなるのか筆者は良く知らない。山本義丸氏の目録(1958)には見当らなかったし, 西川芳太郎氏のまとめられた“箕面の同翅目”(1980)の中にも記録されていなかった。高井 泰氏は岐阜県関市産を写真で紹介されている(昆虫と自然, Vol. 15, No. 10, P. 32, 1980)。1982年9月13日神戸の芦谷溪谷で蜂谷幸雄

氏が2頭採集された。一応記録として報告しておき度い。標本は同氏の御好意で筆者が保管している。

イシガケチョウの思い出

松 本 健 嗣

1959年9月26日名古屋を中心に甚大な被害をもたらした伊勢湾台風、阪神地方でもかなりの風雨であったがその翌々日28日秋晴れの日豪雨で荒れた山径を辿って摩耶山へ登った。山上の展望台広場を占拠しているツマグロヒョウモンを採集して、ふとロープウェイ駅の上空を見上げるとゴマダラチョウ春型を一廻り小さくしたような白っぽいタテハチョウが威勢よく飛び廻っている。粉れもなくイシガケチョウであった。その後10月3日今度は和泉山脈岩湧山へ行った。南麓の根古谷を進んでゆくと此処でもイシガケチョウが4・5頭杉木立の上を活発に競飛していた。だが先日と同様たゞ啞然と見上げるばかりであった。神戸摩耶山では1966年6月30日にふたゝびこの蝶を見ている。

以上が私のイシガケチョウ採集失敗記録であり、他に近畿中北部では見たことはない。その当時私はガイドブック等を読んで本種(*Cyrestis thyodamas*)はクロコノマチョウと共に近畿中部でも稀ではないものと思っていた。だがその後はクロコノマ程採集例を聞かない。大阪の知人の話では和泉山脈方面でも1960年代に入ってからサッパリ見られなくなったと云う。神戸での本種の採集例として手許にある文献では京阪神の動物(東 正雄 六月社)には1961年7月23日六甲山、1948年摩耶山での記録が載っている。また1938年の昆虫界には1936年須磨一ノ谷で2頭とれたことが記されている(横山光夫)。

アオスジアゲハ冬至に屋外で羽化

松 本 健 嗣

昨年(1982)の立冬以後はたいへん暖く、一向に冬らしくない陽気が続いたが12月22日冬至の日正午過ぎ神戸市中央区国鉄元町駅南側の街路クスの根元で横倒しになりかすかに翅を震わせているアオスジアゲハを拾った。ストーブのそばに置いたところ、やがて翅を半開するに至ったが付属肢を動かす迄には至らなかった。正常の春型で翅は完全に伸長していた。

当日の天候は曇りで早朝の最低気温は7.4度Cで発見当時同所では10度Cくらいであったと思う。因に神戸での11月の平均気温は14.7度C、12月に入ってから8.7度Cで例年よりもかなり高かった。それでも12月6日には日中の最高気温6.8度Cでかすかに粉雪が舞っている。その後11日には南風により17.7度C迄上昇したが、19日には最低気温0.4度Cを記録している。もっともこれらの数値は山手の高台にある神戸海洋気象台での測定によるものであり羽化地点は高架により北西風が遮ぎられ、南側は広い車道で日当りは良好。それに空気が汚いので暖かい日溜りなのだろう。それとこの不時羽化との因果関係は無論私には知る術もないが何かの参考にと報告させて頂く次第である。

宝塚市におけるセマダラナガシクイの採集記録

新 家 勝

本誌第9巻第1号以来、報告している宝塚大橋照明燈での蛾の採集の際、他の昆虫についても一部調査している。今回は、それらの昆虫のうちからセマダラナガシクイについて報告する。

セマダラナガシクイ *Lichenophanes carinipennis* Lewis は、体長10ミリ余、黒褐色で、前胸背には粗大な瘤起と点刻を有し、鞘翅にも粗大な点刻を有する特異な形状の甲虫である。これまで兵庫県下での採集記録は僅かであるとのことであるが、筆者は宝塚大橋における蛾の採集の際、次の通り幾度か本種を採集している。

1. 1979. 6. 1 宝塚市南口2丁目

宝塚大橋照明燈に飛来し、欄干に静止しているところを採集したもので、標本は筆者が保存している。

2. 1982. 6. 1 宝塚市南口2丁目

採集時の状況は前述1と同様であった。種を確認しただけで標本化しなかった。

3. 1982. 7. 8 宝塚市武庫川町

前述2と同様。

キマダラカミキリの採集および目撃記録

新 家 勝

キマダラカミキリ *Pseudaolethes chrysothrix* Bates は、金毛におおわれ、ビロード状の模様を現わした美しいカミキリである。これまで筆者は本種を1頭、採集したのみであったが、1982年には宝塚市およびその近辺でかなりの個体を見かけた。1982年には、本種が多発したように思われるので、報告する。

1. 1963. 6. 13 西宮市日野町、日野神社境内。

初めての採集品であったので、くもの巣にかかった死骸であったにもかかわらず標本化した。ただし、その後の破損が激しかったので、廃棄した。この採集地は、昭和46年3月に県の文化財「天然記念物」に指定され、保護されており、西宮市内での有数の自然林である。

2. 1982. 5. 28 宝塚市武庫川町、宝塚大橋照明燈。

宝塚大橋照明燈で採集した昆虫として記録するため、標本化し、筆者が保存している。

3. 1982. 5. 30 宝塚市武庫川町、宝塚大橋照明燈。

種の確認だけで標本化しなかった。

4. 1982. 6. 3 宝塚市武庫川町、宝塚大橋照明燈。

前述3同様。

5. 1982. 6. 12 大阪府能勢町上杉、三草山中腹。

クヌギの古木樹皮上を歩行中のものを発見した。

6. 1982. 6. 18 猪名川町槻並、三草山中腹。

前述5同様。

7. 1982. 8. 6 宝塚市南口2丁目、宝塚大橋照明燈。

前述3同様。

ミカンヒゲナガゾウムシ神戸市内に産す
(兵庫県甲虫相資料・125)

高 橋 寿 郎

ミカンヒゲナガゾウムシ *Phloeobius alternanus* Wiedemann, 1816 は Bengal 産で記載された種であり (Zool. Mag., 1(3):172, 1816) 日本からは Sharp が Lewis 採集

の1頭に基いてWalkerがCeylonから *Anthrribius apicalis* として記載された種 (Ann. Nat. Hist. (3) iii, P. 62, 1859) として *Phloeobius apicalis* として記録された (Trans. Ent. Soc. London, 1891: 319, 1891), 産地は書いておられないが大変状態の悪い標本で触角も欠くと記されている。割合大きくて仲々はっきりした斑紋を有するヒゲナガゾウムシなのだが余り産地が知られていない。勿論兵庫県からの記録も無かった。1982年7月28日神戸市の烏原貯水池畔柵の柱上に静止している1♂(体長口吻を入れて14mm)を採集したので記録しておきたい。

この様な大形種が今まで県下から知られていなかったことは不思議である。尚本種と同定したのは森本博士の論文によった (Esakia, No 14, P. 6-8, 1979)。

またこの *Phloeobius* 属の日本産ヒゲナガゾウムシは現在この種を含めて4種が知られているが兵庫県下にはセマルヒゲナガゾウムシ *P. gibbosus* Roelof, 1879 を産するだけである。こちらも余り県下での産が知られていない。一応既知産地を記しておく。川西市大和, 笹部 [仲田, 1978], 川辺郡猪名川町三草山麓 (1♂ 5-VII-1980, T. Takahashi leg.), 多紀郡 [鈴木, 1961], 水上郡 [山本, 1958], 城崎郡三川山 [高橋, 1981], 京都, 大阪から記録のある *P. stenus* Jordan, 1923 の方はまだ県下から見つかっていない。他の1種は九州に分布している種である (*P. mimes* Sharp, 1891)。

神戸産珍稀なコガネムシ数種の記録 (兵庫県甲虫相資料・126)

高橋 寿郎

最近須磨区在住の田中正浩氏が神戸市内で採集されたコガネムシ類を持参来宅同定を求められた。拝見した所いづれも神戸産としては珍しいもの否兵庫県下全般にとっても珍しいもの、また中には兵庫県初記録種もふくまれていた。そこでこれ等のコガネムシの記録を此処に発表させて頂き度いと思う。貴重な標本を検査する機会を与えて下さり、発表を赦された田中正浩氏の御好意に対し厚く御礼申しあげる(標本は総て現在田中氏が保管)。

○ チビサクラコガネ *Anomala schönfeldti* Ohaus, 1915

本種はサクラコガネを小型にしたような大変きれいな種である。分布も本州, 九州, 朝鮮が知られていて伊豆諸島にも産する。尚その内の三宅島には亜種 *miyakensis* Nomura, 1967 が知られている。

東海地方では成虫の発生のピークは6月中旬～7月中旬と8月上旬～中旬の2回で成虫は群飛した後芝草に降りて交尾、産卵し、幼虫越冬とのことである(芝生の病虫害と雑草, 1979)。

兵庫県下からの記録は今迄筆者が六甲山で採集した1♂(20-V1-1948)だけでその後全く見出せなく分布に就いて疑問に思っていたのであるが今回田中氏は須磨の燈火に飛来した1♂を採集され(20-1V-1982)、本種の分布が再確認された。かつて大阪の千里で5月に電燈に多く飛来すると云って2♂♂(18-V-1972)を地元の方に頂いたことがある。電燈に飛来するケースが多いようであるが東海地方の成虫の出現期よりこのあたりは早いようである。この時期もっと注意したらいるのではないだろうか。芝草を食害してゴルフ場などで問題になっているケースがあるようである。

○ オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis, 1887

本種が摩耶山で採集出来た、いや採集されていないと大いに話題になったのは戦前であるがとうとうこの摩耶山からの記録は正式には出ないままに現在に致っている。戦後中条博士から住吉で1♀が採集出来ていると云う御教示を頂いた(1♀, 22-V111-1954)。これが神戸市に於ける唯一の記録である(この件に就いては1981年に若干報告した。てんとうむし, №7, P.25)。摩耶山は杉が多いことからこの種の棲息の希望も全く無いわけではないが何分にも最近の様な急激な開発で自然環境は極度に悪化してまず絶望的と考えていたのであるが今回前の中条博士の住吉と住吉川をへだて、東側の岡本の道路の側溝を歩んでいたものを採集したとその新鮮な標本を見せられて驚くと共にまだこの種がいるのだと喜んでいる(1♂, 16-V111-1976, M. Tanaka leg.)。やはり注意しなくてはいけないと痛感している。

○ ホソコハナムグリ *Glycyphana tonkinensis viridis* Sawada, 1942

本種は沢田玄正博士が台湾産で *G. gracilis* Sawada として新種記載された時日本に産するものは亜種 *viridis* Sawada として記載された(*Zool. Mag.*, Vol. 54, №6, P.241-242, 1942)。原産地は奈良, 土佐, 鹿児島である。現在はトンキンが原産の *G. tonkiensis* Moser (*Deutsche Ent. Zeitschr.* 1914, P.594)の台湾亜種, 日本亜種として夫々取扱われている(小林, 昆虫と自然, Vol. 15, №2, 1980)。

近畿地方の西部, 四国, 九州, 屋久島に分布しているが兵庫県からは全く記録されていなかった種である。

筆者の手許には奈良春日山産2♂, 1♀(17-V11-1957, 23-V1-1959, 28-V1-1959, 芝田太一氏採集), 鹿児島県佐多岬産1♂ 1♀(18-V-1959, 三宅義一氏採集), 鹿児島市城山産1♂, 2♀♀(15-V1-1953, 加治木氏採集)の標本がある。体長は全部11~12mmである。

九州産のものは腹面両側は白斑が多くあり、やゝ緑色を呈する。でも佐多岬産の1♂は腹面の白斑がほとんど無い。奈良県春日山産は腹面黒褐色で白斑をほとんど欠く。共に表面に白紋もほとんどない。

この兵庫県産のものは体長11mm, 表面には白紋をほとんど欠く。前胸背の側縁中央から前方, 特に前縁角付近に白黄色に縁取られ, 腹面黒色を呈する。即ち奈良春日山産に大変よく似ている。今回田中氏は神戸市内の太山寺でシイの樹より割って取り出されたものでこの個体以外に見当らなかったとのことであった(1♂, 25-1V-1982)。本種が神戸市内にいたことがわかったことは大変うれしい。

以上3種のコガネムシは神戸市, 兵庫県下では大変珍しい種であるが他にも田中氏が持参された神戸産のコガネムシには次のように割合少い種がふくまれていた。ハラゲピロウドコガネ, 神戸市太山寺産, 1♂, 1♀, 20-1V-1982, 須磨, 1♀, 20-1V-1982。ナラノチャイロコガネ, 神戸市太山寺, 1ex., 25-1V-1982(カエデより)。ヨツバクロチャイロコガネ, 太山寺産, 1♀, 20-1V-1982。ヒラタチャイロコガネ, 太山寺, 2♀, 20-1V-1982。尚最近神戸市内からはほとんど姿を消してしまったし, 採集の記録の無いキョウトアオハナムグリの1♀が太山寺で採集されていた(23-V1-1982)。またこの種を蜂谷氏も須磨で採集され(1♂ 9-V11-1982)御恵与下さった。

○ 兵庫県より新に記録されるコガネムシ2種について。

仲田元亮氏が1982年12月に“増補改訂 能勢の昆虫, 甲虫の部, 上・下巻”を自刊されたがその中で上巻, P.259, 339-13, ヒゲトハナムグリ, 川西市笹部産(5-V-1973)。P.289, 371-45, オオサカスジコガネ, 川西市東畦野一の鳥居~東能勢吉川(妙見口駅)産(21-V1-1964)と記録されている2種は兵庫県下からの記録としては始めてのように思はれるのでこの2種に就いて若干説明しておき度い。

1. ヒゲトハナムグリ

本種はLewisにより1895年にHonshu産で*Anthypna pectinata*として記載された(Ann. Mag. Nat. Hist., (6) xvi, P.388, 1895)が1938年にChapinがこの亜科の検討をされた時本種を*Anthypna* 属から*Amphicoma* 属に移されその後沢田博士(1950), 野村氏(1959)等によりその様に扱はれ現在まで*Amphicoma* 属が用いられて来た。最近になって小林裕和氏はChapinの論文を検討されてLewisが始めに記載した時に使用した*Anthypna* 属とすべきであるとの考えを示しておられる(月刊むし, No.141, 143, 1982)。一方三宅義一氏は琉球産オオヒゲトハナムグの体色の変化に言及されいくらかの型があるとされ, 従来の台湾ヒゲトハナムグに加えて新に台湾産の新種記載もしておられる。但し之等の総て属*Amphicoma* として取扱っておら

れる（北九州の昆虫，VoI. 29, No 3, 1982）。

本種は関東地域には比較的多くいるようで新島・木下両博士の論文でも東京産2♂で図説され（1923），加藤正世，久次米正雄両氏が始めて本種の♀を図説されたがその当時の産出状況も関東地方にだけのように報じておられる（昆虫界，VoI. 4, No 25, 1936）。

本種が関西地方に分布している状況は所有文献が貧弱なので筆者は余り良く知らない。分布が本州，四国となっているから多少少ないながらも産地はあると考えられる。たゞ兵庫県下のみを眺めた場合本種が確実に産するとした文献は見当らなかった。たゞ八幡英夫氏が“日本産ヒゲトハナムグリ亜科に就いて”（関西昆虫学会々報，Vol. 12, No 1, 1942）なる論文の中で本種の産地を“Osaka, Near, Hyogo”としておられる。これが何を意味しているのか戦前八幡氏を存じあげていただけに確かめておけばよかったと今でもくやまれる。この記録が本種の少くとも兵庫県に関しては唯一のものであると思はれる（その時の本種の産地も主として関東，中に青森と云うのはあったが関西での産は示されていなかった）。

今回仲田氏は笹部で採集されたことを記録されたわけで本種が兵庫県に確実に分布していることがわかって大変喜んでいる。仲田氏に産出状況を御尋ねした所，笹部の（大和団地のすぐ下）栗林の下草を飛んでいるのを採集したものでこの1頭以外採集しておられないとのことであった。

尚学名は前に記した様に *Anthypna pectinata* Lewis と扱うべきかと思う。

2. オウサカスジコガネ *Anomala osakana* Sawada, 1942

本種は大阪の Zyohoku-koen 産♂，Hiradate 産♀をタイプとして沢田玄正博士によって記載された種である（Trans. Kansai Ent. Soc., VoI. XII, pt. 1, P. 40, 1942）。

大阪の城北公園には当時割合いたらしく筆者も当時の同公園産2♂♂，1♀を大倉正文氏より頂いている（4-V11-1943）。現在この地では状況が変わっているのでどうなっているのか知らない。比較的産地の報告の少ない種である。分布は大図鑑で本州（西部），九州，屋久島となっている。

近年浜松シーサイドゴルフ場に多く発生することが報告され所謂“芝草を加害するコガネムシ類の研究”が吉田正義・梅村孝志両氏によって発表されていて（静岡大学農学部昆虫学教室特別報告，第4号，1981），その中で本種の産出状況も報告されている。また細辻豊二，吉田正義両氏著“原色図鑑，芝生の病虫害と雑草，1979”の中にもカラーで図説その生態を発表されている。このことからゴルフ場に本種が発生するとすれば全国で最も多くのゴルフ場を有する兵庫県には当然いるのではないかと考えていた矢先の仲田氏の記録である。恐らく県下の産地は他にもあると考えられる。仲田氏の記録は氏自身の採集でなく山下 晶氏の採集されたものであるので詳しい状況等はわからなかった。

県 関 係 文 献 紹 介

- 奥谷禎一編，都市と昆虫。環境生物研究会刊，B5，58p. 1982年9月。

この論文集は1981年10月に神戸大学農学部で行なわれた日本昆虫学会第41回大会のシンポジウムの講演論文5編と大会々長のあいさつ，座長の感想をまとめられたものである。いずれも吾々の身近な問題に対するものが多いので大変参考になる。兵庫県関係の講演は青木 卓 氏の“市街地と郊外地の昆虫相の差異”（P.12-20）と題するものが調査地点の明記は無いが兵庫県下でのものであると思はれるし，神戸港のポートアイランドの調査が取り入れられている。一般に入手し難い文献を御恵与下さいました編者，奥谷博士に厚く御礼申しあげる。

- 淡路自然研究保護連合会・編。“島の生きものたち（淡路の生物誌）”。神戸新聞出版センター刊，1982年11月。B6，210p.

昭和55年1月より2年9ヶ月の間に延べ133回にわたって神戸新聞淡路版に連載された「島の生きものたち」に若干の補筆・修正を加えて1冊にまとめられたもので執筆者は登日邦明氏を代表とする淡路自然研究保護連合会のメンバー9氏による。動物，植物，昆虫に就いてその項目毎に主として生態写真がつけられているので大変楽しく読める。一般を対象としたものであるが大いに有益である。133項目に別けられていてその内昆虫は50項目（50種）で甲虫はその中で13種あった。昆虫の解説者は登日邦明，堀田 久，竹田俊道氏である。また登日氏による“島の昆虫類について”の概説もある。（一般書店で販売・定価980円）。

- 仲田元亮，“増補改訂 能勢の昆虫”甲虫の部，上・下巻，蝶の部。A5版，1982年12月刊。

多年にわたる能勢地域での昆虫の分布調査をまとめられたもので1970年に始めて自刊されて以来今回のもので3回目となるが実に立派な内容となっている。たゆまざる著者の努力に対して心から敬意を表したいと思う。

今回のものは甲虫の部上・下と蝶の部の3冊にわけられていて甲虫の方は上巻453p. 48科，613種，下巻508p. 45科，699種。蝶の部は304p. 8科，89種，文献からの記録5種が加わっている（甲虫の方では上巻613種の内大阪の産地のみの種が68種，下巻で96種があるので上・下巻で兵庫県下からの記録種は1149種と云うことになる）。また1970年版では600種，1978年版で1035種，今回は1312種と次々と種も増加している。1978年から今回に致る間の追加種は適宜本誌“きべりはむし”にも発表されていた。一応今回のまとめで兵庫県から始めて記録されたものは16種ある（反面2種はシノニムで減ずべきものもある）。

何と云ってもこの様な長期間の調査の結果を独力でまとめると云うことは大変なことで、同定上の誤りとか学名の誤りも無きにしもあらずでさらに配列などの注意とか種毎には産地別の表示の方が年代別のものよりよいように思はれたり、これまで収録されるのであれば採集頭数を種によっては入れてはしかなかった等々の問題点は有るだろうが一つの業績として高く評価しなくてはならないと考える。(東京通販サービス社で取扱っている)

- Miyatake, M. 1982. A New Genus and Two New Species of the Tribe Hypulini from Japan (Coleoptera: Melandryidae). Trans. Shikoku Ent. Soc. Vol. 16, No. 1-2, PP. 29-35.

1978~1979年に須磨区内妙法寺地域での自然環境調査がホームサービス(株)の手で実施され筆者も何回かその調査に同行させて頂いた。その関係から調査で採集された甲虫類の標本は同社の永井正身、荒木 裕両氏の御好意で全部筆者の手許に保管することになった。之等甲虫類の再同定の結果については簡単な報文も発表させて頂いた(兵庫生物, 8巻, 3号, PP. 153-155, 1982)。この甲虫類の中でどうもわからないナガクチキムシ7 exs.があった。早速愛媛大学の久松定成氏に同定を御願ひするため標本を御送りした。そして同氏からこの類を専門にしておられる宮武睦夫氏に研究を委ねていただいた。

其の研究結果の論文がこれである。お蔭で後翅の退化した新属、新種として発表して頂けたわけで御両氏に厚く御礼申しあげたい。因にこのナガクチキムシの学名は *Nipponomarolia kobensis* Miyatake, 1982 となる。神戸市内にまだこの様に珍しい甲虫がいることがわかって喜んでいる。

- 佐用ライオンズクラブ(1982) "千種川の生態, 第10集" 39P.

この文献に就いては既に西村 登氏の紹介がある(ひょうご陸水生物, Vol. 3, No. 1, 1983)。筆者も一部送って頂いたが仲々立派な出来で楽しく且つ有益に拝見させて頂いた。

同 好 会 誌

ひょうご 陸水生物(兵庫県陸水生物同好会々報) Vol. 2, No. 4(1982年12月), Vol. 3, No. 1(1983年2月)。

てんとうむし No. 8(姫路昆虫同好会々誌)(1982年12月)

Parnassius, No. 27, Insect, No. 28(淡路昆虫研究会々誌並びに連絡誌)(1983年1月)

(T)

編 集 後 記

- 今冬は暖かい冬でした。神戸でも寒いと感ずる日はそう多く無かったように思われます。1月7日暖かいので市内の山の街へオサ掘りに出掛けてみました。あたり一面住宅街、僅かに残っていた地域にもブルドーザーが入って整地をしていました。かつての昆虫の宝庫の片鱗をさえとどめない様替りです。神戸市内での開発は遠慮会釈なく続けられていて虫達の棲家も次第に姿を消しています。恐ろしくもあり淋しい限りです。
- 本号には始めて写真を入れて見ました。本来ならもっと写真の掲載出来る会誌にしたいのですが現在の財政状況ではとても無理に思います（著者費用負担の場合は別）。早く毎号この様な会誌にしたいものです。（別刷も作製していません。費用著者負担の場合は相談させていただきます）。
- 依然原稿難です。毎号毎号のことよく発行出来るものだと感心しています。会誌発行が出来ない状態に追込まれないようにいかなる短報でもお寄せ下さい。

次号は11月発行です。原稿は9月末迄にお願いします。 (T)

きべりはむし 第11巻第1号

昭和58年5月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸5-72052

印刷：蝶文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
